

ポジショニングによる自尊心の変化について

— 私の重要度に着目して —

○川上真緒¹・榎本知子²

(¹東亜大学大学院総合学術研究科・²東亜大学人間科学部)

目的

ポジショニング(positioning)とは、ある“私”から別の“私”へと、違う“私”になりきる行為のことをいう(溝上, 2013)。溝上(2013)はポジショニングにより主体化される“私”が変わることで、各々の“私”の自尊心レベルや自己イメージが異なることを明らかにした。しかし、溝上(2013)は各々の“私”の重要度の違いを考慮しておらず、自尊心の変化の要因には“私”の重要度が影響している可能性が考えられる。本研究では、大学生を対象に、ポジショニングが自尊心に及ぼす影響について、“私”の重要度に着目して検討することを目的とする。

方法

参加者: 最終分析対象者 42 名 (男性 21 名, 女性 21 名)。平均年齢 19.90 歳 ($SD=1.15$), 年齢範囲 18 ~ 22 歳)

材料: ① ローゼンバーグの自尊心尺度日本語版(桜井, 2000): 1 次元尺度計 10 項目, 4 件法

② 付箋: 20 枚 (7.5 cm × 7.5 cm の正方形のもの)

③ ポジショニングの出来具合: 1 項目, 6 件法

手続き: 参加者をポジショニング操作有りの実験群 (21 名), ポジショニング操作無しの統制群 (21 名) の 2 群にランダムに振り分け, 実験は個別に行った。

手順(実験群の場合): ① 自尊心尺度への回答(一般的自己) ⇒ ② WAI (“Who am I” 技法)による“私”の抽出 ⇒ ③ 抽出した 20 個の“私”の中から最も重要な“私”を 3 つ選び重要度が高い順に“私 1” “私 2” “私 3” と記入 ⇒ ④ “私 1” に対するイメージ作り(ポジショニング) ⇒ ⑤ “私 1” になりきった状態で自尊心尺度に回答。“私 2” “私 3” も同様の手順で行う ⇒ ⑥ ポジショニングの出来具合に回答 ⇒ ⑦ インタビュー

※ 自尊心尺度の回答順序は, 「“私” の重要度の高い

順から低い順」と, 「低い順から高い順」でカウンターバランスを取った。統制群の⑤については、一般的自己の 2 回目として測定した。

結果

群 × “私” の種類(一般的自己, 私 1) を独立変数とし, 自尊心得点を従属変数とした 2 要因混合分散分析を行った結果, 群の主効果は有意ではなかった ($F(1, 40)=0.42, n. s.$)。“私” の種類の主効果, 交互作用は有意傾向に留まった ($F(1, 40) = 3.32, p < .10; F(1, 40)=3.64, p < .10$, Figure 1 を参照)。

実験群を対象として“私”の重要度を独立変数とした 1 要因の分散分析を行ったが, 主効果は有意でなかった ($F(3, 63)=1.26, n. s.$, Figure 2 を参照)。

個別分析では, 女性に限定し, “ポジショニングが十分に出来た”参加者 A さんと“あまり出来なかった”参加者 B さんを選出し, 各々の特徴を個別に検討した (Figure 3 を参照)。A さんの場合は, 一般的な“私”はネガティブだが, “私 1-3” にポジショニングすることでポジティブなイメージに変化し, 各々の“私”の自尊心も高くなることが示唆された。一方 B さんの場合は, 一般的な“私”はポジティブだが, “私 1” へのイメージはネガティブなものに変化し, “私 1” の自尊心も低くなる傾向が見られた。

考察

“私”の重要度と“私”の自尊心へのポジショニング効果との間に関連は見られず, しかもポジショニングによって“私”の自尊心の変化も見られなかった。一方個別分析では, 各々の“私”の自尊心へのポジショニング効果が示唆された。この結果は, 3 つの“私”の重要度が真に高いものではなく, 重要度の違いがないためだと考えられる。以上を踏まえ, ポジショニング効果を再検討する必要がある。

